

基礎から読み解く DPC 第 3 版

実践的に活用するために

松田晋哉 著

松田晋哉氏の著書『基礎から読み解く DPC 第 3 版—実践的に活用するために』が刊行された。著者は評価システムともいべき DPC について設計・開発から普及まで厚生労働省の作業を中心に主導してきた研究の第一人者である。

初版から筆者も含め当院職員が利用しており、対象病院にとっては診療や病院運営の見直しや今後の方向を考える際の参考書として、新たに導入を検討されている病院には座右の書としてぜひ購入をお勧めしたい。

言うまでもなく、DPC は医療の標準化あるいは効率化という点においては利点があり、特に DPC によって医療が透明化されるので、エビデンスに基づいた医療が推進されると思われる。また、病院経営者からみると、DPC により病院の経営状況を把握しやすいという面はあると思われる。一方では、DPC に対する欠点ないし疑問として、将来の医療の制度として満足すべきものなのか、あるいはよく問題視される粗診粗療になるのではないのか、医療の安全は確保されるのか、利用者（患者）の満足度は損なわれないか、などが挙げられている。そのような予想される利点や欠点を視野に入れた好著となっている。

この内容の中で個人的に最も共感するのは、第 4 章「DPC と医療職」である。病院経営は、多くの職種の職員によって支えられているのであるが、病院の医師をはじめ看護師、薬剤師あるいは診療情報管理士など、職員のそれぞれにとって DPC とのかかわりは極めて深いのである。奇しくも本年 6 月の第 13 回日本医療マネジメント学会学術集会では「チームで目指す DPC 環境下の病院運営」の司会を松田氏と共に担うことになっているが、病院職員にとって良好なチームを

形成するための DPC データの利用方法が示されている。

また、新たに加わった内容として特に注目されるものは、第 1 章「診断群分類とは何か」での「機能評価係数」である。これまでの「機能評価係数Ⅰ」に加えて 2010（平成 22）年度から調整係数の約 25%を置き換えるべく導入された「機能評価係数Ⅱ」について丁寧に解説されている。すなわち、調整係数は段階的に機能評価係数に置き換えられていくのであろうが、その設定の検討を継続的に進め、DPC に基づく診療報酬体系をさらに刷新していくことが必要であると強調されている。

本書の全体の流れから、DPC は単なる診療報酬の支払いシステムではなく、病院の経営構造や診療内容を検討するための重要なデータベースシステムであることがわかる。そして筆者もこれまで述べてきたが、医療の質とコストについて検討する際のエビデンスは DPC によって極めて有効に明示されるのである。DPC という共通の基盤による急性期病院の評価は、今後のわが国の医療制度の方向性を探る大きな社会実験という見方がある。その意味でも大きな役割が期待されている DPC であるが、本書が DPC 環境下の病院経営と医療政策の指針として多くの医療者の必携となることを期待したい。

札幌社会保険総合病院病院長 秦 温信

B5 頁 240 2011 年

定価 3,570 円（本体 3,400 円＋税 5%）

【ISBN978-4-260-01205-8】医学書院刊